

五才児の記録

(3)



磯 堀 合 文 真 子

時計つくりがはじまるまで

先生は一学期のうちに何かひとつ大きなまとまったことをしたいと考えている。木工道具を準備して、木工をするのもいいし、おみせやのつつきとして、時計をつくって時計屋にするのもいいなどと考えている。こうしたある日、子どもたちの方から「時計」がでて

きたのでこれをとりあげることにする。

六月九日 火曜日

石あつめ、時計をつくりはじめる。

六月のはじめから、庭にしきつめてある砂利をふるいにかけて、砂と石をふるいわけて砂をばけつに入れて砂場に運んだり、小石を洗って干したり、小石をビニールの袋に入れて水を入れ、かざしてみたりなどのあそびがみられた。今朝も①、⑧、Ⓐがビニールの袋に小石をあつめている。

保育室に入つてみると、先生が戸棚の奥

から大きい石をいくつかだしている。そして机の上に並べる。①たちが小石を入れたビニールの袋を持って庭から入ってくる。机の上

の大きい石を見て、

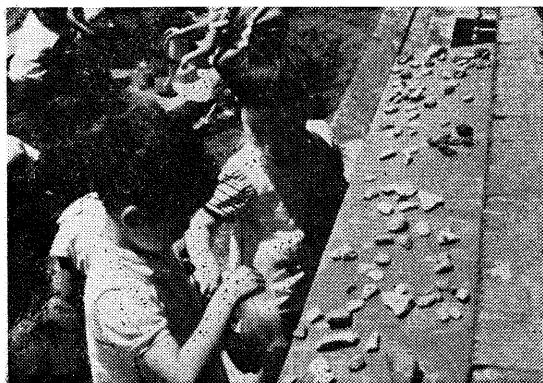
Ⓐ 「わー、大きい石」

① 「どうしたの。」

Ⓐ 「どこにあったの。」

先生 「ずっと、ずっと

石を洗ってほす



前に川からとつてきたのよ。」

①「この大きい石、何にするの。」

先生「何かにしたいわね。」

子どもたちはあつめてきた石を大きい石のそばに並べる。

Ⓐ「これ、何だか、べっちゃんこね。」

①「これ、おもしろい形」

先生「おや、おや、この石、何になるかしら。」

子どもたちが並べた石を見る。

先生「何かかいてみたらどうかしら。」

⓪「何をかこうかしら。」

Ⓐたちは石を囲んではなしをしている。

先生は小石を拾いに庭にでる。

Ⓐたちはマジックを棚からだしてきて、石に絵をかきはじめる。

Ⓐ「これ、じやがいもよ。」

⓪「わたし、いちご。いちごって黒いボツボツがあるわよ。わ

⑩、「わたし、いちご。いちごになっちゃった。」

⑪、「おにぎりみたいになっちゃった。」

先生が小石を持って庭から入ってくる。

先生「あら、いい色にぬれましたね。」

とみんながかいているものをみる。

先生「先生は、こういう石を拾つてきたわ。」

とまわりの子どもにみせる。

先生「顔をかこうかしら。顔をかきましょ。」

とひとりごとをいいながら、マジックでかきはじめる。

◎「させて、これ、なあに」と石をみておどろいている。◎は皆がかいしているのをしばらくみている。

先生「さて、これ、何にしましょうね。」

◎「ええとね、おいもにするわ。」

Ⓐたちは、ふたつめや、みつつめをかいている。

先生「できたのをどこかに並べましょうね。」

先生は子どもたちがつくった野菜や魚を別の机の上に紙をしいて並べる。

先生「お魚や、野菜をここに並べますよ。」とみんなにいう。

先生「こんどはクレヨンでかいてみるわね。」

⓪「わたしもやってみよう。」

Ⓐ「おいものお母さんができた。」

⓪「クレヨンでぬるといいわよ。」

◎「ここ、おみせやさんみたいね。」

先生「ねえ、いいこと考えたわ。」と、先生は色がみを小さく切つ

て石にはつてみる。

Rは大きい石に顔をかく。

。石に時計をかく。

Ⓐが大きい石に数字と針をかいて時計にする。

K「せんせい、石で何かつくりたい。」

先生「どうぞ。いろいろおもしろいものができるわよ。」

先生はⒶが時計をかいているのを見て、

先生「あら、Ⓐちゃんのおもしろい時計ができましたね。」

くを計時や顔に石



Ⓐ 「もうひとつつく

る。」

先生 「時計がたくさん

できると時計屋さ

んができるわね。」

Ⓑ 「今度は何をつく

ろうかな。そう

だ、ケーキをつく

ろう。」

先生 「あら、いいです

ね。おいしくやい

て下さいね。」

E 「これ何、これだ

れの。」

先生 「Ⓐちゃんがつく

る。」

Ⓐ 「Tちゃんのいいわね。」

先生 「鳩時計ですって。」

T 「作りかけの鳩時計を持って、

T 「今、三時だよ。ハホ、ハホ、ハホ。」と歩いている。

先生はYの振子にするための紙を切っている。

R 「先生、もういっつくりたいの。」

先生 「どうぞ」

Yは振子時計にするつもりで、振子をつけるところをチューリップの花の形にきりぬいたのだが、文字板をかく時に箱を横にしてか

いたので、ふりこをつけるところが、文字板の下にこないで、文字

と振子時計をつくりはじめる。

○ 空箱や小石で、鳩時計や、置き時計、腕時計をつくりはじめる。

先生は空箱を持ってくる。

先生「箱でも時計ができるわね。」

と振子時計をつくりはじめる。

T 「先生、バネをつかって、とびだすのにしたら。そうだ、先生

と、同じじやないものをつくろう。」

と、Tは箱を持ってきて鳩時計をつくりはじめる。女児たちはまた小石を拾ってきて、ドライベンシルで、石に目もりや、針を書いて、時計にする。

先生は女児がつくった小石の時計をみて、リボンをだしてきて、腕時計にしてみる。

先生「リボンに模様をつけるといいわ。」と、子どもたちにいう。

子どもたちが、同じ色のリボンだけをつかっているのをみて、

先生「同じ色ばかりじゃなくていろんな色のリボンをつかつたら」と、子どもたちにいう。小石の腕時計がたくさんできる。

H 「先生、ぼくは、自動車みたいのがつくりたい。」

Y 「ぼくは振子の時計つくりたいな。」と、それぞれ箱をだしてくる。

Ⓐ 「Tちゃんのいいわね。」

先生 「鳩時計ですって。」

T 「作りかけの鳩時計を持って、

T 「今、三時だよ。ハホ、ハホ、ハホ。」と歩いている。

先生はYの振子にするための紙を切っている。

R 「先生、もういっつくりたいの。」

先生 「どうぞ」

Yは振子時計にするつもりで、振子をつけるところをチューリップの花の形にきりぬいたのだが、文字板をかく時に箱を横にしてかいたので、ふりこをつけるところが、文字板の下にこないで、文字

板の左側になってしまい、振子がつけられなくて困ってしまう。先生のところにいて、はなしている。

先生は箱を手にとつて、考えていたが「置き時計にしたらどうかしら、ここに機械を入れて。」といふ。Yはほつとして時計を持つてくる。①は小石に模様をかいて、指輪をつくる。

おべんとうの時間になる。先生は「つづきをまたしましようね。」と皆にいう。そしてYに「機械はあした入れることにしましようね。」とはなす。

六月十日 水曜日

どくきのこをみつける。砂場に「人間の河」をつくる。

庭から山につづく坂道の段々の杭に小さいきのこがたくさん生えているのを、⑩たちがみつけてクラス中大きになり、みんなかけだして見に行く。

H「うわー、どくきのこの行列だ。」

S「どこ、どこ」

先生も子どもたちについて見に行く。

今日も石洗いがはじまる。

A「Yくん、石洗いやらない。」

Y「きのうのつづき」

A「おもしろいの。」といって、バケツやふるいをだしてくる。

Hは砂場で砂を掘っている。先生も砂場にきて砂を掘りはじめ

る。

先生「どういうのにしようかしら。」

といいながら、砂場いっぱいに人間の形をかきはじめる。

H「あっ、首がない。」

先生「あれ、ほんと」

先生やHの声をきいて、石洗いをしていたAやYが砂場にくる。

A「ぼく、やめた。」

Y「ぼくも、やめた。」

A・Y「先生、入れて」と入ってくる。

先生「どのくらい掘る。」

H「地球の底まで掘ろうよ。」

A「ぼく、顔を掘るよ。」

Y「ぼくも顔を掘るよ。」

KやIも入ってくる。

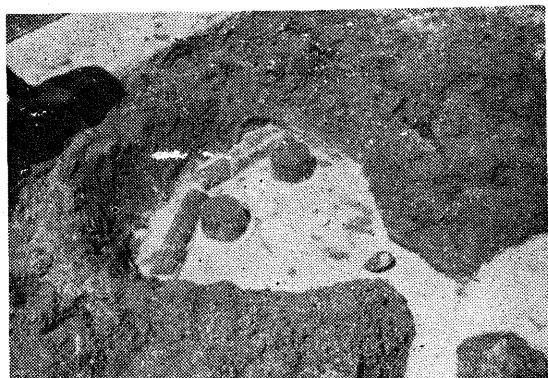
先生「みんな力いはい掘ってね。先生もいっしうけん

めい掘るわ。」

H「指はどうする。」

I「指がないよ。つ





K 「けようよ。」

K 「眼がないよ。眼がないと見えないよ。」

H 「みんながやらないと水がたまらないから入つてよ。」

U 「みているんだよ。」

H 「だけど、みんながやらないとたまらないよ。」といいながら水をくんでいる。

丸太を鼻にして顔をつくり終り、AやYも水をくみはじめる。水がたまりはじめ、ハケツや丸太がほこほこ浮かびはじめる。

A 「わー、鼻がどれちやうよ。」

Y 「眼がどれちやうよ。」

といいながら眼や鼻をととのえる。

I 「あ、いいこと考えた。まゆげをつけよう。」と丸太を二本持つてくる。

H 「ほたんをつけようよ。」

I 「ほたんをつけよう。」とばけつをふせて置き、ほたんにする。体全体に水がたまる。

H 「わー、人間の河ができるよ。人間の河」

みんな歓声をあげる。

先生「女の人たちにもおしえてあげたら。」

H 「ぼく、おしえてくる。」と保育室に呼びに行く。女児は保育室でおひめさまごっこに夢中になっている。Hといっしょに見にくくが、すぐに保育室に入っていく。

H は水をくんでくる。

H 「水がながれないよ。」
先生は立ち上って全体をみまわす。

先生「あら、できたわ。上方からみてごらんなさい。できたわよ。」

H 「みんなでやらなければいけないんだよ。水つてたまりっこな

いんだから。」

先生「あら、足が一本しかないわ。」

六月十一日 木曜日

昼食後から帰るまでの遊び。
遊戯室で子どもたちが十七、八人くらいいっしょになつて、魚に

なつて泳いでいる。ピアノを大きい岩にみたて、その他椅子や、平均台などもそれぞれ海の底のものにみたてる。はじめのうちは部屋中泳ぎまわっていたが、ぐるぐる走りだし、鬼ごっこになる。保育室ではおひめさまごっこをしている。庭では野球、ボールなげ、たいこ橋をしている。

六月十二日 金曜日

先生が黒板に時計をふたつかく。

鳩時計、置き時計ができあがる。

腕時計がたくさんできる。

朝、子どもたちは登園すると遊戯室にかけて行く。きのうのつづきで遊戯室を走りまわっている。あたりは海で、子どもたちは人魚になっている。

先生は保育室で黒板いっぱいに大きい時計をふたつかく。ひとつは数字の文字板の時計で、もうひとつは花の文字板の時計である。五才児のクラスで六月に時計をつくると数字に興味をもたない子どもがいて、時計をつくることに抵抗を感じている子どももいる。

Tが「時計のつづきをする。」といつて先生のところにくる。先生は「はい、鳩時計さん」といつて、Tに時計をわたす。女児が五人、机にすわって絵をかいている。となりの机にはいちごの空箱に牛乳のふたがたくさん入れてある。Hが牛乳のふたに針をかいだり、数字をかいだりしている。

H「こんどはもうちょっと針を長くしてできあがり。もういっこつくつちゃおう。もう十二個もつくつちゃおう。」

と、ひとりごとをいっている。

先生「ええ、どうぞ、いっぽいつくつて下さいね。自分のもできるし、おみせやさんのものできるし。」

とHに話しかける。Hのかいた時計をみて、

先生「腕時計、どうしましようね。やっぱりリボンをつけましょうか。」

H「どうやってつけようかな。」とかいた時計を見る。

先生「そうね、セロテープかのり」とい

つしょに考える。

H「セロテープにし

よう。」とセロテー

プをとりに行く。

H「五時から十時

とうたいながらつ

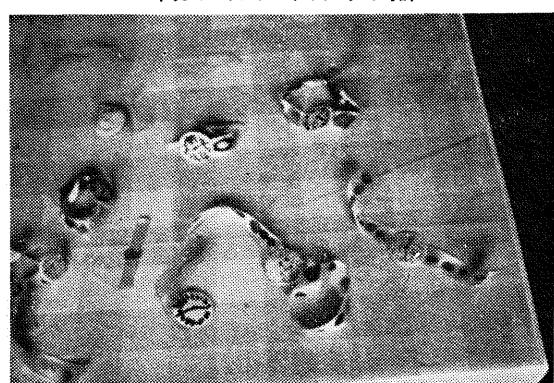
くった時計を満足

げにみる。

H「そうだ、はさみ

を持ってこよう。」

T「鳩時計をつくつたら、腕時計をつくろう。」



K 「Hちゃんみたいのつくる。」

先生「どうぞ」

K 「六時の時は長い針はどこ」

先生「ええとね、短い針が六で長い針は十二ですよ。」

先生は絵をかいている子どもたちにはなしかけている。

先生「Tちゃんの時計に模様をつけたらどうでしょう。」

T 「針をつけたら模様をかこう。」

H がリボンを切ってくる。

牛乳のふたにかいた時計をセロテープでリボンにつける。リボンを腕に結ぼうとするリボンが短くて結べない。

先生「ゴムでつないだらどうかしら。」と考える。

H 「あーゴムがいい。」

先生「リボンに穴があくかしら。」とリボンに穴をあけるところにセロテープをはり、穴あけ器で穴をあけて輪ゴムをとおす。

先生「Hちゃんできあがりました。」と腕時計をHにわたす。Hは腕にとおしてみて、

H 「ちょっととゆるいくらい。」

T 「じゃ、ここをつめましょうね。」とゴムをつめる。Hは次々とリボンに時計をつけて、穴をあけて輪ゴムをとおす。

T は模様をかきはじめる。

T 「鳩をかこう、ほんとうにかこうかな、どうしようかな。ぼくの花の模様にしようかな、ぼく、ほんとうに花の模様にしよう。」

かな。」

とひとりごとをいいながら、HやKがつくるのをみている。鳩をかきはじめる。花もかく。

(M)が保育室に入ってくる。

T 「(M)ちゃん、ぼくの時計」と(M)にみせる。

(M)「あ、鳩時計」と笑う。

T 「できちやつた。今、一時だよ。」

先生は鳩時計につけるものをさがしている。糸まきをふたつ持つてくる。

先生「Tちゃん下につけるのがいるわね。これに色をぬつたらどうかしら。」

T は先生からうけとつて、

T 「針と同じ色にしようかな。」

先生「そう、黒でもいいし、赤でもいいし」

T 「赤にしよう。」

先生はSがつくりおえた振子時計を「カチ、カチ」といしながら振子をゆらしてみる。

庭では男児が自動車競争をしている。(S)たちは子どもの家でおひめさまごっこをしている。絵をかいていた(S)たちはたいこ橋に行く。

T が色をぬりあげて、先生のところにくる。先生はどういうふうにつけようかと考える。

T 「ひっぱるのがいいよ。」

先生「あ、そろそろ、それがいいわ。」と紡績糸を持ってくる。

Tの時計ができ上り黒板のところにかざる。

文字板や、模様や装飾は各自工夫してつくる。
望遠鏡のつくり方

①は置き時計をつくっている。

先生は「①ちゃんの台、りっぱな台にしなければね。」と台にする紙をさがす。

R「ぼく柱時計にきめた。」と黒い箱を持ってくる。

先生「その箱はくろくてみえないから、紙にかいてはった方がいいわね」という。

Tは手を洗いはじめる。

T「先生、ピンクの石けんになっちゃった。なぜだと思う。」

H「手が赤いから、どれ、ピンクの石けん」と見に行く。

六月十三日 土曜日
望遠鏡をつくる。

四才児のクラスから月曜日に四才児のクラスで開かれる水族館の

案内状と切符がとどく。

先生はどんな時計をつくろうかいろいろと考える。画用紙で置

き時計をつくってみると、女児が先生を囲んで置き時計をつくりはじめる。男児は望遠鏡をつくる。

置き時計のつくり方

画用紙を十センチ巾くらいに切る。

長い方を二等分くらいに折る。

ある一面を文字板にする。

画用紙に自由に絵をかく。
まるめて筒状にする。

筒の先端にセロファン紙をはる、

四月以来子どもたちがつくったものが、保育室の片すみの机の上に並べてある。

空箱でつくった飛行機、ヨット、自動車、起重機、

ダンボールの箱でつくった陣列台（魚屋、花屋、お菓子屋、おも

ちゃ屋、洋服屋）

石でつくった野菜、時計。

先生は「できたらお店屋さんに並べておきましょう。」と子どもたちにいう。

時計の製作中に先生が、いつたり、したりしたことががら。

・柱時計を作る子どもが、振子の見える窓を開ける時、箱がかた

くて切りにくい場合切りはじめだけ手伝う。

・時計の針を文字板にとめる。

・空箱を使った場合、箱のもようや広告をそのままに残しておか

ないで、自分で考えた模様や色をつけるようにする。

・製作をした後の紙くずなど後始末を忘れないようにする。

林の組（四才児）の子どもがふたり、林の組で開く水族館への案

内状と入場券を持ってくる。ちょうど雨が降ってきて、庭にいた子どもたちも入ってきて、子どもたちがかわるがわる案内状をよむ。

先生がまわりを片づけはじめる。

I 「ねえ、先生、まだお片づけじゃないでしょ。」

先生「あのね、せつかくだけど時計をみたら、もうお片づけしなければならない時間なのよ。」とIに腕時計をみせる。

望遠鏡のセロファン紙がうまくかなくて一時間近く苦心してい

た(R)、がお片づけになってしまい、まだできなくて、つい泣きだしてしまふ。先生は(R)をなぐさめながら、手伝つてセロファン紙をはつてあげる。

片づけ終つて、帰り仕度をして全員席につく。

先生「ほら、こんなにたくさん時計が並んでお店屋さんみたいでしょ。きのうはふたつかみつしかなかつたけれども今日はたくさんの方がお手伝いして下さつたからこんなにたくさん並んだのね。まだお手伝いして下さらない方も月曜日にまたお手伝いして下さいね。ほらこんな時計もあるのよ。(と、二、三の時計をみんなにみせる。)

これはJちゃんのだけれど、とってもきれいにぬつてあるでしょ。こういうふうにきれいにぬるといいわね。これは(R)ちゃんのだけれど犬のこんなにかわいい時計ね、おもしろいわね。」

次に林の組からきた水族館の案内状を全員に報告する。それから、時計の歌をうたつて帰る。

六月十五日 月曜日

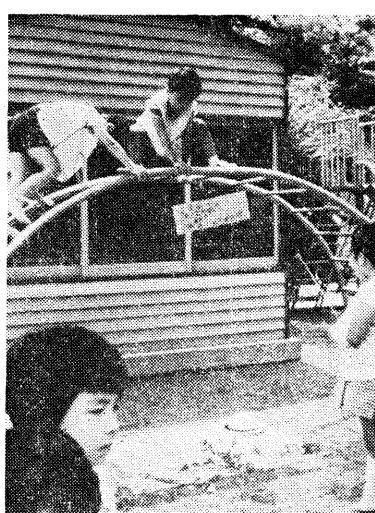
林の組の水族館に行く。びん時計をつくる。

時計がつくれるように机の上にマジックやクレバースがおいてある。

砂場では男児がふたり太平洋をつくっている。砂を深く掘つて水をためる。

「太平洋はもっと大きいよ。こんな河みたいじゃないよ。もっと大きくしようよ。」

「幼稚園よりも大きいの。」



たいこ
橋の下で
は花屋さ
んごつこ
がはじま
つてい
る。
(R)「先
生お花屋
さんの看
板をつく

るの、紙をちょうだい。」

先生「あら、いいことを考えたわね。じゃ④ちゃん、ここにかいた
ら」と、ダンボールを切つて、④にわたす。④は上からつ
せるようにしようとする。

先生「上からつるすの。いいことを考えたわね。」
と先生も手伝つて穴にひもをとおす。

④「先生、『な』はどうかくの。」

先生「あー『な』という字はね、こうかくのよ。」と別の紙にかく。

④は『おはなやさん』と看板にかく。

④は紙にマーガレットやすずらんの絵をかく。

④「お花がこれだけあるっていうのをかいだの。」と先生のこと
ろに持つてくる。

④は看板をつくりあげて庭で

て行く。

先生は④の看板をみて。

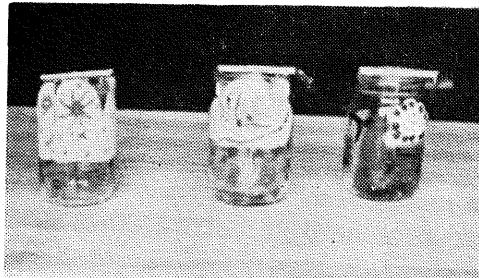
先生「あら、きれいにできたわ
ね。」という。

びん時計

先生はマヨネーズの空びんに模
様をかいている。④もびんをもつ

てきて、模様をかきはじめる。先
生はびんに合わせて割り箸を切つ
てびんにわたし、振子をつける。

びん時計



④もびん時計をつくりはじめる。④は人形の振子をつくる。人形に
ひもをつけて上からぶらさげる。

先生「あらお人形が空からぶらさがっているみたいね。ぶらんこに
のせてあげましょうか。」と、ぶらんこをつくる。でき上つて、
びんをもつて、ゆら、ゆら、ゆらせてみる。

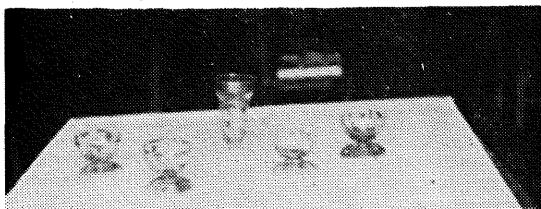
林の組から水族館の案内がくる。「やーまのくみすいそっかん」と皆うれしそうに、それぞれ遊んでいたところから集まつてくる。先生から水族館の切符をうけとつて、みんなそろつて林の組に行く。林の組では保育室の壁にそつて水族館ができる。中ほどの広場に魚つりができるよう箱つみ木でつりぼりができる。紙でつくつたいろいろな魚が入れてある。あみとつり竿が置いてあるが、五才児にとつてはつり竿でつる方がおもしろいらしくあみですくつていた子どももつり竿のあくのをまつている。

六月十六日 火曜日

アイスクリームのカップに模様をかいて、ままごとあそびの道具
にする。

④がアイスクリームのカップに、模様をかいている。①もきてか
きはじめる。①はままごとあそびに入った今まで今、おつかいにで
かけたところである。かきおわると、ままごとコーナーに行き、
「いいものがありましたよ。」と皆にみせる。「ふたもできるし、コ
ップになるのよ。」といいながら模様をかいたカップでさかんに
お客様をもてなす。

アイスクリームのうつわに模様をかく



もようをかいたうつわをままごと道具にする



朝のようす

くみ板

飛行機とばし

大積み木

すべり台でままごとあそび

二人

五人

四人

花屋さんごっこ

三人

二人

一人

先生は絵をかいている子どもたちに

先生「いっしょうけんめいかいでいるのね。」と声をかける。

T「お魚をかいっているの。」

H「お魚の本をみせて。」と、Tのところにきて絵をかく。

しばらくしてTが先生のところに行く。先生に何かいわれて、ま

たかきはじめる。魚だけをかいていたが、こんどはまわりをぬりはじめる。Tはまた絵を持って先生のところに行く。

先生「ああ、こんどはお水があつていいわね。」と、いつてTの絵をみてTとはなしている。

。毛虫

Eが毛虫をつかまえてくる。

E「先生、毛虫をとったからびんをちょうだい。」

F「これ、ほんとうのちょうちよになるんだよ。」

G「もしかしたら、黒と白になるのよ。」といつている。

先生は子どもたちの声をきいて保育室からでてくる。

先生「かわいがつてあげましょうね。ごちそうもいるわね。」

といひながらびんを取りに行く。

KたちはEがとつてきた毛虫をみて「おい、みんな、こういう毛虫をみつけてこようぜ。」といつて一團となつて走つて行く。先生は「ほんとうはみかんのはっぱがいいのね。さて、何のはっぱがいいかしらね。はっぱを探してきましょうね。」といつて子どもたちといつしょにはっぱをとりに庭にでる。しばらくして木の葉をとつてきてびんに入れる。びんの中の毛虫をみて「おうちに入つたら長くなつて遊んでいるわよ。びんからでないと思うけれどもでるといけないから」といひつてガーゼを持ってきて輪ゴムでとめる。

H「あした、みかんのはっぱを持つてくるね。」

先生「おねがいね。」といひ。子どもたちは毛虫を囲んでひとりひとり夢中になつてはなしている。

「うしろは、とんがつていいよ。」

「もう、さつきより大きくなつてある。」

「ちようちよになつたらにがしてあげるけれどな。」

「ちようちよになつたらきれいだらうな。」

「そうだけれど、林の組に見せなければ。」

「ほんとうのちょうちよは青虫からなるんだよね。」

「もつと見つけてこようか。」

「おい、みんな、バトンを置いていこうぜ。」

子どもたちは走つて毛虫をとりに行く。



毛虫がおちないようにはしどつかんで

「うしろの三角をみてくれよ、ちょうどちょうどになると思つた。」

「先生を呼んでくれよ。」「ここが武器だぞ。」

「もしかしたらもんじろちようになるかもしれないよ。」

子どもたちが虫さわぎをしている間に、先生は、つくりかけの時計を机の上にだしたり、空箱を机の上に置いたり、戸棚から紙をだしたりする。子どもが「先生、大きい虫を見てちょうだい。」と先生を呼びにくる。

「先生、今、くるつてさ。」

「これ、ずいぶん重いよ。」

先生が保育室からでてくる。あまり大きい虫なのでおどろく。

先生「それ、何の虫でしょう。」とびっくりして虫をみつめる。

「うしろがとんがっているから蛾だよ。」

「ひとりずつ並んで。」

子どもたちが多勢集まつていて虫が見えない。

「先生を呼んできたからのいてくれよ。」

「男ばかりじゃないんだよ。女人にも見せなければ」

結局、Kは虫を桜の木にのぼらせる。子どもたちはしばらく虫を見あげている。

。大きい時計をつくる

虫騒動のあと子どもたちはみんな保育室に入つてくる。(M)は空箱でカメラをつくりはじめた。Eが「大きい時計をつくりたい。」といふ。先生は、物置きに箱をきがしに行く。

先生「Eちゃんさがしてきたわよ。」と大きいダンボールの箱を二

つ持つてくる。

E「あつ、ふたつつくろう。みんな、はさみを持つてこい。はやく、まずこれからつくろう。」

とちょっと小さい方の箱をだきあげる。

先生「ここからはさみを入れるといいわ。」と箱に穴を開ける。

E「ようし」といきごむ。

先生「みんなでよく相談してつくって下さいね。」

男児7人がいっしょにつくりはじめる。

「おいそだんしよう。」

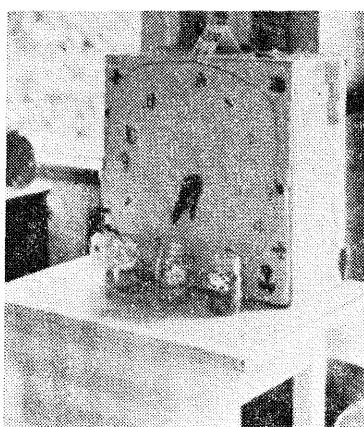
「色はぼくがぬるよ。」

先生はダンボールにはる紙をきがしている。振子をつけるところをきりぬき、ふりこと針もできる。いよいよ文字板に文字を入れることになる。先生は文字の位置に鉛筆でしるしをつける。

先生「字でも、字でなくともいい。けれども、字を

かくなら順番にしなくてはね。みんなでよく相談しながらかいてちょうだい。」

(つづく)



皆でつくった大時計